

機 関 名	果樹試験場		課題コード	H230306		事業年度	H23 年度 ~ H32 年度		
課 題 名	ナシ・ブドウ・モモ・その他果樹の育成系統及び新品種の適応性検定試験(第4次)								
機関長名	森田 泉			担当(班)名	品種開発部				
連絡先	0182-25-4224			担当者名	主任研究員 田口 茂春				
政策コード	2	政策名	国内外に打って出る攻めの農林水産戦略						
施策コード	1	施策名	“オール秋田”で取り組むブランド農業の拡大						
指標コード	6	施策の方向性	生産・消費現場と密着した試験研究の推進						
種 別	重点(事項名)		本県に適応性のある樹種・品種・系統の選定					基盤	
	研究		開発	○	試験	○	調査		その他
	県単	○	国補		共同		受託		その他
評 価 対 象 課 題 の 内 容									
<p>1 研究の目的・概要</p> <p>ナシでは品種構成の是正を目的として有望な早生品種、省力低コストを目的に自家和合性・自家摘果性・耐病性等を有する新たな系統について選抜を行う。ブドウでは着粒の安定した良食味大粒系統について選抜を行う。モモでは早生品種や極晩生品種について、オウトウでは‘佐藤錦’の受粉樹になる良食味系統について、本県の気象条件での適応性を検討し、有望系統を選抜する。</p> <p>さらに、消費者ニーズの多様化や温暖化の進行に対応するため、本県のような寒冷地では栽培が困難であった樹種及び品種の適応性を検討し、本県果樹産業の発展を目指す。</p>									
<p>2 課題設定の背景(問題の所在、市場・ニーズの状況等)</p> <p>本県の果樹栽培は、経営の安定化を目指して、リンゴとモモやオウトウ等を組み合わせる樹種複合経営が増加している。また、ブドウ産地では、依然として中粒種の生産が多く、消費者ニーズの高い大粒種の導入が遅れている。さらに、ニホンナシ産地は、‘幸水’主体であるため気象変動により経営が不安定である上、労力が集中するなどの問題を生じている。このような状況下、今後所得の向上を図るためには、作業性を考慮に入れた品種の選抜が必要と考えられる。このため、樹種複合経営への対応、気象災害の回避、労力の分散と軽労化を図れる樹種や新品種が求められている。</p>									
<p>3 課題設定時の最終到達目標</p> <p>①研究の最終到達目標</p> <p>県内で産地化されているナシ・ブドウ・モモ・オウトウについて、品質、栽培特性及び気象災害等の危険回避や省力化といった観点から新品種を評価し、適応性の高いものを選抜する。また、温暖化に対応した樹種についても同様に評価・選抜する。</p> <p>②研究成果の受益対象(対象者数を含む)及び受益者への貢献度</p> <p>(1)栽培農家(ニホンナシ、ブドウ、モモ、オウトウ生産者等)及び果樹栽培新規参入者:新品種導入により、気象災害等の危険回避、分散が図れ、安定経営が可能になる。また、省力樹種や品種の導入により経営面積の拡大が可能になる。</p> <p>(2)消費者:少量であるが多くの種類を食べてみたいという近年の消費者の要望に対応できる。</p>									
4 全体計画及び財源 (全体計画において ≡ 計画 ≡ 実績)									
実施内容	到達目標	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	(最終年度)	
系統適応性試験(ナシ・ブドウ)	本県の気象条件に適応性が高い優良系統の選抜							32年度	
有望品種の適応性試験(ナシ・ブドウ・モモ・その他果樹)	気象変動に強く、省力化が可能な優良品種の選抜								
温暖化に対応した樹種及び品種の適応性試験(カキ・イチジク)	本県の気象条件で栽培可能な樹種、品種の選抜								
ニホンナシの新品種育成試験	自家和合性・自家摘果性・耐病性などを有する食味良好な系統の選抜								
									合計
計画予算額(千円)		1,100	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,400
当初予算額(千円)		771	617	494	368	373	313		3,859
財源内訳	一般財源	771	617	494	368	373	313		3,859
	国 費								
	そ の 他								

観点	
1 ニーズの状況変化	<p style="text-align: center;">○ A ● B ○ C ○ D</p> <p>・ニホンナシ、ブドウについては、依然として‘幸水’や‘キャンベルアーリー’に偏った品種構成になっており、管理作業の分散や市場性の観点から、品種の適切な組み合わせが必要となっている。生産者からは、ニホンナシでは、‘幸水’より収穫期が早く生産性の高い品種や、自家和合性等を有する新品種が求められている。一方、ブドウでは、消費者ニーズが大粒種に移行しており、贈答用に向く赤色大粒品種や早生の黒系品種の要望が高くなっている。</p> <p>・モモでは、県南部では旧盆前、県北部では‘川中島白桃’の後に収穫できる品種の要望が高い。また、軽労化果樹として、カシス、ラズベリー、イチジクなどに産地化の動きがあり、県内への適応性や栽培特性に関する情報が求められている。</p> <p>【評価委員のコメント】</p> <p>・各品目とも、作期の拡大や品質向上への産地ニーズが高い。</p> <p>・多様な樹種について取り組んでいることから、生産サイドの要望に加え、消費動向については、より丁寧な情報収集を心がけてほしい。</p> <hr/> <p>A. ニーズの増大とともに研究目的の意義も高まっている C. ニーズの低下とともに研究目的の意義も低くなってきている</p> <p>B. ニーズに大きな変動はない D. ニーズがほとんどなく、研究目的の意義がほとんどなくなっている</p>
2 効果	<p style="text-align: center;">○ A ● B ○ C ○ D</p> <p>・ニホンナシは、早生品種や省力化が可能な品種の導入により、‘幸水’に偏重した栽培管理作業の分散が図られる。</p> <p>・ブドウは、優良な赤色品種の導入により、黒色、緑色品種とのセット販売が可能となり、商品性の幅が広がる。</p> <p>・モモは、県南部では旧盆前の早生品種の導入により、盆需要への対応が可能となる。また、県北部では9月中下旬に販売できる晩生品種の導入により、遅出し産地としての有利性が高まるなど、県南から県北への販売リレーが円滑になり、県産モモのブランド化に寄与できる。</p> <p>・オウトウは、受粉樹不足が解消され、高品質安定生産が図られる。</p> <p>・スモモは、栽培が容易で旧盆前に収穫可能な品種が選ばれることにより、結実が不安定な‘貴陽’の生産を補完できるようになる。</p> <p>・ラズベリーやイチジクなどの軽労果樹については、従来の生産者以外の農家が導入することにより新たな産地が形成されるなど、果樹生産の拡大や活性化が図られる。</p> <p>【評価委員のコメント】</p> <p>・作期の拡大による労働力の分散や、新たな産地の拡大等が図られることから、現地での普及拡大が期待される。</p> <p>・課題で取り組んでいる樹種はどれも他県より少ない生産量であるが、新品種への更新を加速することで市場での優位性を高めることが可能となる。</p> <hr/> <p>A. 大きな効果が期待される C. 小さな効果が期待される</p> <p>B. 効果が期待される D. 効果はほとんど見込めない</p>
3 進捗状況	<p style="text-align: center;">○ A ● B ○ C ○ D</p> <p>・系統適応性試験（農研機構果樹研究所育成系統）</p> <p>ニホンナシは平成27年に5系統（筑波59～64号）を接ぎ木し、苗木を育成中である（天王分場）。ブドウは平成22年に導入した3系統（安芸津28～30号）について調査した（本場）。セイヨウナシは平成25年に3系統（札幌4～6号）を導入し、試験樹を育成中である（本場）。</p> <p>・有望品種の適応性試験</p> <p>ニホンナシは早生種4品種、晩生種1品種、‘秋泉’の受粉樹として2品種導入している。うち、‘香麗’は食味良好だが小玉、‘なつみず’は食味淡泊で心腐れがあり、‘サザンスイート’は糖度は高いが小玉で果形が悪かった（天王分場）。</p> <p>ブドウは赤色や黒色系の8品種を調査した結果、そのうちの赤系‘ロザリオロツツ’は発芽、開花の揃いが悪く、着色も不安定で本県への適応性は低かった（本場）。</p> <p>モモは、県南では平成27年に4品種を導入し、試験樹を育成した（本場）。県北では12品種を導入し調査した結果、‘夕月’‘かぐや’‘玉うさぎ’は‘川中島白桃’より収穫期が7日程度遅く、糖度はいずれも14%以上で食味が優れ、‘川中島白桃’のりレー品種として有望と判断した（かづの果樹センター）。</p> <p>スモモは3品種を導入し調査した結果、‘ハニーローザ’と‘サマーエンジェル’は小玉であるが食味が良好で豊産性のため、県内への適応性は高いと判断した。一方、‘バイオチェリー’は‘貴陽’の既存の受粉樹と比較し優位性がみられないことから適応性が低いと判断した（本場）。</p> <p>オウトウは2品種を導入し調査した結果、‘紅ゆたか’は大玉で食味も良く有望な品種と判断した（本場）。</p> <p>・温暖化に対応した樹種及び品種の適応性試験</p> <p>カキは、平成23～24年の2か年にわたり著しい凍害が発生し、調査が継続できなくなったため、試験を中止した。</p> <p>イチジクは、‘バナネ’の耐凍性が高く、適応性が高いと判断した。‘ヌアールド・カロン’は小玉だが糖度が高く食味に優れた（本場）。</p> <p>・ニホンナシ新品種育成試験（天王分場）</p> <p>平成25年に一次選抜した10個体のうち、9個体を淘汰した。残り1個体は、通常の防除下において黒斑病の発生がみられず、自家和合性が認められたことから、苗木を育成し継続調査を行っている。</p> <p>【評価委員のコメント】</p> <p>・計画どおり試験研究が進んでおり、研究年度内に現場で有用な研究成果が得られることを期待する。</p> <p>・各樹種で品種の絞り込みが進んできていることから、ここ1～2年で新たな成果が期待される。</p> <hr/> <p>A. 計画以上に進んでいる C. 計画より遅れている</p> <p>B. 計画通りに進んでいる D. 計画より大幅に遅れている</p>

4 目 標 達 成 の 阻 害 状 況	<input type="radio"/> A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> D 雪害、凍害に伴う樹体損傷。						
	【評価委員のコメント】 ・雪害、凍害に伴う樹体損傷については、生産現場が抱える重要な課題である。研究を継続することで、課題の解決に結び付くことを期待する。 ・気象災害については万難を排して樹体の健全性を維持するとともに、それでもなお被害を受ける場合の地域適応性の判断を迅速かつ適切に行うべきである。						
総 合 評 価	A. 目標達成を阻害する要因がほとんどない C. 目標達成を阻害する要因がある B. 目標達成を阻害する要因が少しある D. 目標達成を阻害する要因が大いにある						
	<input type="radio"/> A 当初計画より大きな成果が期待できる <input type="radio"/> B+ 当初計画より成果が期待できる <input checked="" type="radio"/> B 当初計画通りの成果が期待できる <input type="radio"/> C さらなる努力が必要である <input type="radio"/> D 継続する意義は低い						
評価を踏まえた研究計画等への対応 各樹種の品種導入については、産地の要望と消費動向を注視しつつ有望な品種の選抜を進め、早期の普及定着を図る。特に、ブドウは、生産サイドから要望の高い赤色大粒種について平成29年度内に選抜する。また雪害、凍害に対して各樹種とも確実に対策を講じた上で適応性を判断する。							
(参考)	事前	中間(24年度)	中間(25年度)	中間(26年度)	中間(27年度)	中間(28年度)	
過去の評価結果	B	B	B	B	B	B	